

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 15 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K10259

研究課題名(和文)統合失調症の実世界でのリカバリーの実態把握と促進・阻害因子の解明

研究課題名(英文) Investigating the rate of recovery in schizophrenia and the factors which promote or inhibit recovery in real world.

研究代表者

渡邊 由香子 (Watanabe, Yukako)

帝京大学・医学部・講師

研究者番号：00709727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：統合失調症のリカバリーがどの程度みられるか、統合失調症圏のデイケア利用者163名を対象に実態を後ろ向き調査し、症状や社会生活機能、主観的体験などとの関連を面接調査にて検討した。その結果、デイケア開設当初を除き、デイケア利用開始からほぼ20年のうち、当初の5年で症状や社会機能が改善し、それが維持されていたことが示された。また改善と並行して就労者や一人暮らしの割合の増加がみられた。婚姻者は少数で、薬物療法の主剤(定型薬・非定型薬)による差異はみられなかった。面接調査では、対象者のリカバリー達成度は精神疾患一般と同程度で、精神症状、認知機能、社会機能とリカバリーはそれぞれ負、負、正の関連を認めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デイケアを経過した統合失調症患者では、当初の5年で社会機能や精神症状が改善し、その後20年の経過の中でその改善が維持されていたことを実証できてことで、社会生活に障害を持つ統合失調症にとって包括的なリハビリテーションの重要性が示された。パーソナルリカバリーの達成度は精神疾患一般と同程度で比較的良好であったことが示された。その中で、就労や住環境、婚姻といった社会的要因に関する課題や、精神症状、認知機能、社会機能がリカバリーと関連していた。リカバリーに影響を与える要因が示されたことで、統合失調症の社会生活を改善するための介入が明確になった。

研究成果の概要(英文)：To investigate the rate of recovery, which is the treatment goal for schizophrenia, we conducted medical record investigation of 163 day treatment users of schizophrenia spectrum disorders, and examined the relationship with symptoms, social functions and so on. As a result, it was shown that during 20 years after the start of using day care, the symptoms and social functions improved in the first 5 years and have been maintained throughout 20 years, except early 5-year users. In parallel with the improvement, the ratio of working people and living alone have also been increased. The number of married people was small, and there was no difference in recovery rates between whether the main drugs (typical or atypical). In the interview survey, the degree of recovery achievement of the subjects was almost similar to that of general mental illnesses, and there were negative, negative, or positive relationships, respectively, between mental symptoms, cognitive function, social function and recovery.

研究分野：精神科リハビリテーション

キーワード：統合失調症 リカバリー 精神科デイケア 認知機能 社会機能

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 実世界での統合失調症からのリカバリーはどの程度起こりうるか

近年薬物療法が発展し、精神障害者への社会的支援が豊かになり、障害者雇用の制度も整備されつつあるが、実生活における統合失調症からの回復はどの程度であろうか。期待がもたれた第2世代抗精神病薬の改善率は、第1世代抗精神病薬と比べて社会生活の回復において統計的な有意差がなかったとする報告 (Lieberman, 2005) がある。Harrow ら (2007) によるシカゴにおける平均 15 年の追跡研究では、回復している人の割合は、調査時点で服薬していない人 40%、服薬している人 5%であった。初瀬 (2016) は全国精神保健福祉会と共同で家族会参加者 1,492 名の調査を行ったが、仕事や学校に行くことができている人は 11%、原家族から離れて生活できている人は 17%に過ぎず、日常生活への満足度は、「まあ満足している」を含めても 41%であった。こうした調査からは実際に回復する人はまだ統合失調症の一部にしか過ぎないと考えられる。

(2) リカバリー概念の発展

精神・身体にかかわらず障害がある人たちにとって、近年リカバリーということばは重要なキーワードとなっている。リカバリーという考え方は、源流をたどれば 20 世紀前半のセルフヘルプ運動やユーザー運動から出発しているが、1970 年代にノーマライゼーションや自立、そして QOL の重視から発展して、当事者の側から主体としての生の豊かさを強調する言辭が発表されるようになった。そして、1990 年代には精神障害リハビリテーションの中心的な概念と認識されるようになっていく (田中, 2010)。1990 年代後半には、ニュージーランドを皮切りに、先進諸国において精神保健行政の方針としてリカバリーの考え方が採用されるようになった (野中, 2005)。リカバリーは、精神症状・客観的な社会生活・主観的な自己価値観やセルフスティグマなど、多面的と考えられる。統合失調症が好発する青年期にあって、長期にわたって医療を受け、不安・苦痛をもたらす精神症状に向き合い、障害があることを受け止めて、多数の人たちとは違う自分なりの生き方を探していくことの困難さは、仲間の中に同一化しようとする社会的欲求が強い青年期にあって想像以上のものがあるだろう。そのために他者とかかわりながら現実的な希望を持っていくことの困難、あきらめ・絶望、社会的な興味や意欲の低下、社会体験からの学習の困難 (挫折から学習して新たな社会的・現実的希望を持つ事の障害) が引き起こされる。リカバリーは症状の寛解だけではなく、精神疾患を持つ当事者が、たとえそれによる障害や症状が続いていたとしても、主体的に人生をコントロールし、新たな生き方の意味を見だし、ウェルビーイングを達成するプロセスである。リカバリーを統合的に脳機能・心理的機能・個人の生きがいや価値観の視点から理解することが必要となる。

(3) 実世界での統合的なリカバリーを考える上での脳科学の進展

Green ら (2012) は、統合失調症の社会機能の原因として認知機能の低下が想定されているが、神経認知及び社会的認知は直接に社会機能に影響を与えるのではなく、自己についての非機能的認知と陰性症状のうちの意欲・発動性因子が媒介因子となっていることを示した。Strauss (2013) は統合失調症では、実際に快楽をもたらす刺激への情動反応は減少していない一方で、過去・未来の体験の低い見積もりや、快楽体験が得られないとする信念の存在、快楽体験を求めていく行動の減弱があるとしている。Campellone ら (2014) は、より大きな社会的パワーは、より低い内的スティグマおよび意欲・発動性と表出の貧困の障害が軽度であることと有意な相関を示したとしている。こうした一連の研究からは、主観的なリカバリーと客観的な回復とに通底する要因として、意欲・発動性の低下や内発的動機付けの低下、自己価値観と連関した非機能的な自己認知やセルフスティグマがあると考えられ、眼窩前頭野皮質の機能 (Strauss, 2014) など、基盤となる脳機能が推定されている。しかし現状では有効な生物学的な治療はまだ開発されておらず、本人の希望や好みを十分尊重し、治療を継続する、自己価値観に沿った社会生活を支援する、仲間などを通じた回復の希望を持つ、家族をはじめとする環境支援、などにより、内発的動機付け、非機能的な自己認知、自己価値観などの回復が期待される (池淵, 2015)。

(4) デイケアにおけるリカバリー支援

Gaebel ら (2015) は、2020 年までの統合失調症治療の展望を書いているが、新規な治療についてはまだ開発途上である一方、治療の必要な人の半数しか実際には治療を受けていないことに触れ、メンタルヘルスケアの最適化が予後の改善について期待できるとしている。我が国の外来精神医療では、池淵ら (2014) の調査でも、診断によらず新規外来患者の約 16% が生活支援・ケアマネジメントサービスが必要であることを報告している。統合失調症に限ればその割合はもっと高くなる。適切な薬物療法や心理教育をはじめとする心理社会的治療を行うことでアドヒアランス向上や治療からの脱落防止を行い、本人の希望や価値観に沿った社会生活を目指す生活支援・ケアマネジメントサービスにより生活の質の向上を目指すことや、我が国でも普及してきている就労支援 (Sato et al, 2014) などが、統合失調症などの重い精神障害のリカバリーには重要である。そしてこうした包括的支援は、現状の外来医療の制約の中ではデイケアで主に行われてきたと考えられる。本研究において、まずデイケアを利用した人たちが実際のどの程度リカバリーしているか実態を把握し、次いで、後ろ向き調査によって継続的な変化を把握することで、精神症状・対人機能・主観的な回復体験・社会的役割の再建がどのように起こっているか、またそうしたリカバリーの諸相がどの程度関連しているかを解明したいと考える。

2. 研究の目的

統合失調症の薬物療法や心理社会的治療が進歩し、社会的支援が従来よりも豊かになっている中で、重要な治療目標であるリカバリーがどの程度の人たちに見られるか、実態を把握することが本研究の主要な目的である。またリカバリーは、精神症状の改善、実世界での客観的な生活の回復、対人関係や社会的役割の改善、自己価値観やセルフスティグマなどの主観的体験等の諸側面があるが、それぞれの側面がどのように関連しているか、リカバリーのメカニズムを解明することが二次的な目的である。同時にリカバリーを促進（または阻害）する要因についても検討し、リカバリーのプロセスを促進するデイケアシステムを明らかにし、本格的な多施設介入研究の基礎とすることも目的とする。

3. 研究の方法

(1) 対象：1988年11月から2012年12月の間に研究実施機関のデイケアに登録され、5年以上の経過調査が可能であった統合失調症圏（ICD-10：F2）の患者163名を対象とした。診断の判定は、主治医によるカルテ記載及びデイケア開始時におけるケースカンファランス記録をもとに経験年数17年の精神科医師1名が行った。

(2) 方法

実態調査：対象者をデイケア開始時点により5群に分け（第1群：2008年1月～2012年12月、第2群：2003年1月～2007年12月、第3群：1998年1月～2002年12月、第4群：1993年1月～1997年12月、第5群：1988年11月～1992年12月）登録後から5年ごとに、カルテ及びデイケア記録に基づき、利用開始5年後から最長25年後まで後ろ向き調査を行った。主たる評価項目は社会機能および疾患重症度とし、副次的評価項目は当事者らの生活状況とした。具体的な評価項目は次の通りである。

a. 基本属性：性別・初発年齢・デイケア開始までの罹患期間・デイケアの利用期間・精神病未治療期間（DUP）・抗精神病薬の使用状況（定型薬／非定型薬）

b. 疾患重症度評価：臨床全般印象-重症度（Clinical global impression-severity, CGI-S）

c. 社会機能評価：概括的機能評価尺度（Global assessment of functioning, GAF）

d. 生活状況：調査時点の前後6ヶ月における住生活、婚姻状況、社会的交流、仕事状況

面談調査：同意を得られた計70名（当事者42名、家族28名）から以下を聴取し、そのうえで、デイケア登録した人のリカバリーの頻度を、精神症状・主観的回復・客観的社会機能などの面から算出した。

a. 主観的なりカバリーの評価：リカバリー評価尺度（RAS）、自己効力感尺度（Self-Efficacy for Community Life scale）、抗精神病薬治療下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版（ウェルビーイング尺度）

b. 精神症状の評価：陽性・陰性症候群評価尺度（PANSS）

c. 概括的な社会生活水準の評価：概括的機能度尺度（GAF）、特定機能レベル評価尺度（SLOF）

d. 社会生活の状況（就労していれば雇用形態、勤務時間、賃金など）

e. 家族から見たリカバリーの評価：家族態度評価尺度（FAS）

f. 現在受けている医療（薬物療法の内容を含む）及び福祉サービスの内容

g. リカバリー促進/阻害要因に関するインタビュー：何が回復を支えてきたか、何が回復を阻んでいるか、どのような支援を希望するか。

なお、調査にあたっては研究実施機関の倫理委員会より承認を得た（帝倫 16-087号）。

4. 研究成果

実態調査

縦断的な経過では、第1～4群のいずれにおいても、デイケア利用開始時と比較してすべての調査時点で、GAFおよびCGI-Sが有意に改善しており、GAFでは50点台後半から60点台に変化し、症状や生活の障害が軽度と判定されていた。CGI-Sでは4点台から3点台となって経過しており、軽症の判定となった。この結果から、デイケア利用開始後ほぼ20年にわたる経過において、当初の5年の間に症状及び生活障害の面で改善が見られ、それが維持されることが示された。

第1～4群を比較すると、非定型抗精神病薬が主剤である割合に明確な変化があったが、GAFおよびCGI-Sの改善量については有意差が見られなかった。

GAFやCGI-Sの改善と並行して、実生活上（住生活・婚姻・社会的交流・就労）にも変化がみられた。まず、就職している人の割合は、第1群～第4群に共通してデイケア利用開始後に増加していた。しかしこの数値は、実際に仕事をしたいと希望している人たちの一部であると考えられ、さらに就労支援の質/量を改善していく必要があると思われた。障害者の法定雇用率は我が国では増加の傾向にあり、特に2018年度からは正式に精神障害者が雇用率算定に含まれるなど、社会制度は本調査期間である1992年から2017年までの時点で大きな変化をしている。その影響により、第1群ではほかの群と比べて、最低賃金以上を得ているもの（一般就労、障害者就労、就労継続支援A型などへの仕事従事）の割合が高かった。住環境では、調査時点を追うに従って一人暮らしの割合が増加していた。社会的自立という側面がある一方で、保護していた親の老齢化もあると考えられる。この点も一人暮らしに伴う負担を支援する社会

制度が充実する必要があると考えられた。婚姻しているものは少数であり、希望している人の一部しかその希望が叶えられていない状態と考えられた。障害を持ち、収入が不十分であっても希望する人々には婚姻が可能となる、社会制度や文化の醸成が必要と考える。

面談調査

良好な長期リカバリー予後を得ることが困難とされる統合失調症 (Jääskeläinen et al., Schizophr Bull, 2013) においても、本研究が対象とした精神科デイケア利用経験者のパーソナル・リカバリーの達成度は、精神疾患一般患者 (Chiba et al., Int J Nurs Stud, 2010) と同程度であった。また、同対象における臨床症状重症度 (PANSS)・認知機能 (BACS-J)・社会的機能 (SLOF) は、パーソナル・リカバリーとそれぞれ負・負・正の関連を示すことが示された。

考察

研究実施機関のデイケアを経過した統合失調症患者では、当初の5年で社会機能や精神症状が改善し、その後20年の経過の中でその改善が維持されていたこと、そしてパーソナルリカバリーの達成度も精神疾患一般と同程度と比較的良好であったことが実証できた。これらのことから、社会生活に障害を持つ統合失調症にとって包括的なリハビリテーションの重要性が示された。

就労や住環境、婚姻といった社会的要因に関する課題や、精神症状、認知機能、社会機能がリカバリーと関連していることが示唆されたことは重要な所見であった。リカバリーに影響を与える要因が示されたことで、統合失調症の社会生活を改善するための介入が明確になった。

<参考文献>

- Lieberman JA, Stroup TS, McEvoy JP et al : effectiveness of antipsychotic drugs in patients with chronic schizophrenia . New England Journal of Medicine 353 : 1209-23, 2005
- Harrow M, Jobe TH : Factors involved in outcome and recovery in schizophrenia patients not on antipsychotic medications: a 15-year multifollow-up study. J Nerv Ment Dis 195 : 406-414, 2007
- 初瀬記史：精神障害者の生活状況や医療ニーズについての報告 大規模な地域家族会参加者への自記式アンケート調査から . 日社精医誌 25 : 8-18, 2016
- 田中英樹：リカバリー概念の歴史 . 精神科臨床サービス 10 : 428-433 , 2010
- 野中猛：リカバリー概念の意義 . 精神医学 47 (9) : 952-961 , 2005
- Green MF, Helleman G , Horan WP et al : From perception to functional outcome in schizophrenia. Modeling the role of ability and motivation. Arch Gen Psychiatry. 56:1216-1224, 2012
- Strauss,G.P : The emotion paradox of anhedonia in schizophrenia:or is it?Schizophrenia Bull 39 : 247-250 , 2013
- TR Campellone, JM Caponigro, AM Kring : The power to resist: The relationship between power, stigma, and negative symptoms in schizophrenia .Psychiatry research 215 (2) : 280-285 , 2014
- GP Strauss, JA Waltz, JM Gold:A Review of Reward Processing and Motivational Impairment in SchizophreniaA Review of Reward Processing and Motivational Impairment in Schizophrenia.Schizophrenia bull 40(2) : 107-116 , 2014
- 池淵恵美：「陰性症状」再考 - 統合失調症のリカバリーに向けて— . 精神神経学雑誌 117 (3) : 179-194 , 2015
- Gaebel W, Großimlinghaus I, Heun R et al: European Psychiatric Association (EPA) guidance on quality assurance in mental health care. European Psychiatry 30 : 360-387 , 2015
- 池淵恵美、初瀬記史、江口のぞみほか：外来患者に生活支援・ケアマネジメントサービスはどの程度必要かー精神科初診患者の全数調査 - .臨床精神医学 43 : 1063-1074 , 2014
- Sato S , Iwata K , Furukawa S et al : The Effects of the Combination of Cognitive Training and

Supported Employment on Improving Clinical and Working Outcomes for People with Schizophrenia in Japan . Clin Pract Epidemiol Ment Health 10 : 18-27 , 2014

Jaaskelainen E, Juola P, Hirvonen N et al : A systematic review and meta-analysis of recovery in schizophrenia. Schizophr Bull 39 : 1296-1306 , 2013

Rie Chiba, Yuki Miyamoto, Norito Kawakami : Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale (RAS) for people with chronic mental illness: Scale development. Int J Nurs Stud 47(3) : 314-322 , 2010

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 S. Kanata, A. Miyo, T. Kaneda, Y. Fujieda, A. Inagaki, K. Sato, N. Hatsuse, Y. Watanabe, M. Suga, N. Anzai, E. Ikebuchi
2. 発表標題 Personal recovery and associated factors among psychiatric day treatment center users with a diagnosis of schizophrenia spectrum disorders in Japan
3. 学会等名 7th European Conference on Schizophrenia Research (ECSR) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 研一、金田 渉、稲垣 晃子、藤枝 由美子、渡邊 由香子、管 心、安西 信雄、池淵 恵美
2. 発表標題 帝京大学デイケア利用者を対象としたリカバリー実態調査（トリプルR研究）における、リカバリー関連諸要因の予備的解析
3. 学会等名 第13回日本統合失調症学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤研一、金田渉、稲垣晃子、金田智代、御代あかね、藤枝由美子、渡邊由香子、管心、安西信雄、池淵恵美
2. 発表標題 統合失調症のデイケアを対象としたリカバリー実態調査
3. 学会等名 東京精神医学会第114回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sho KANATA, Kenichi SATO, Akiko INAGAKI, Akane MIYO, Tomoyo KANEDA, Yumiko FUJIEDA, Yukako WATANABE, Motomu SUGA, Nobuo ANZAI, Emi IKEBUCHI
2. 発表標題 Clinical recovery and social functioning among day-care users with diagnosis of schizophrenia; a retrospective chart study by medical records.
3. 学会等名 The 7th BESETO International Psychiatry Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	池淵 恵美 (Ikebuchi Emi) (20246044)	帝京平成大学・臨床心理学研究科・教授 (32643)	
研究 協力者	金田 渉 (Kanata Sho)		
研究 協力者	菅 心 (Suga Motomu)		
研究 協力者	佐藤 研一 (Sato Kenichi)		
研究 協力者	稲垣 晃子 (Inagaki Akiko)		